

## 図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議（第4回）

### における主な意見

#### ＜デジタル社会への対応、多様な人々のための読書環境の整備に係るこれまでの主な意見のまとめに関する追加意見＞

- 司書教諭や学校司書が個々の生徒の資質・能力の視点も踏まえながら、この部分ではデジタルが優れている、この部分では紙の本が有益であるなど、子供自身が納得して紙資料と電子資料を使い分けできるように説明することが必要ではないか。
- 電子図書館におけるコンテンツ使用料やプラットフォームの使用料の支払いの構造等のサービスの適正性について、契約の観点から今後検討される必要があるのではないか。
- 現在の電子図書館のビジネスモデルのまま、図書館・学校図書館に電子図書館サービスを普及させる場合、相当な支援がないと難しいと考える。
- 11学級以下の学校にも司書教諭を発令されると良いのではないか。また、司書教諭の発令について、1学校内で複数人の発令や、教育委員会による発令を推奨すると良いのではないか。
- 電子図書館を一部の地域で導入しても、別の自治体では導入できていないというケースもある。電子図書館を導入する際は、特定の自治体に限らず、広範囲で活用されると良いのではないか。
- 電子書籍の授業活用が広まるよう、ベンダーと契約する際に授業利用も条件に入れたり、授業内での電子書籍活用に向けたガイドライン等を作成したりすると良いのではないか。
- 学校図書館における館長は学校長であり、学校長を含む館長への研修が重要である。

#### ＜御発表＞

#### 国立青少年教育振興機構・伊藤理事「絵本専門士の養成と活躍について～絵本専門士将来ビジョンから～」

- 絵本専門士は、これまでの10年間で637名を養成した。
- 絵本専門士の職業としては、図書館・学校図書館関係者が最多である。
- 絵本専門士は養成講座を東京で実施しているため、絵本専門士のうち45%が1都3県（埼玉県・千葉県・神奈川県）に在住である。地域偏在性が見られることが課題である。
- 絵本専門士の年齢別では、50歳代以上が57%を占める。若い世代の養成・活躍を図ることも課題である。
- 絵本専門士の少ない地域は、絵本専門士同士の連携も取りづらく、関係団体との連携も難しいことが課題として挙げられる。
- 絵本専門士としての知識・スキルのアップデートとしてのリカレント教育を実施することも課題である。

- 認定絵本士は、高等教育機関で開設された養成講座にて、一定の単位を修得すると取得できる資格である。現在は4,906名である。
- 認定絵本士取得後、絵本関係の業務を3年間実施し、その実績等が絵本専門士委員会から認められることにより、絵本専門士に認定されることもできる。
- 認定絵本士の養成状況をみると、認定者数は毎年度増加しているものの、その増加率は鈍化している。一部の大学では養成講座の定員充足率が低いことも見受けられる。
- 今後10年間を見据えた取組として、「絵本専門士の活動の拡充」、「絵本専門士・認定絵本士の養成の充実」、「絵本専門士の活動を支える仕組みの構築」の3点を推進する。

### 松木委員「JPIC読書アドバイザーの活用から見た読書推進人材の在り方」

- 平成5年3月に第1期「JPIC読書アドバイザー養成講座」を開講し、定員100名のところ、1,200名からの応募があった。
- 第4期は東京と大阪で開講したり、第6期は50名定員にしたり、ウェブを活用した開講などの工夫をしながら、現在はスクーリング形式・100名定員で実施している。これまで定員割れがないまま実施している。
- 講座では、読書、読み聞かせのみにとどまらず、出版の基本的事項である編集・印刷、流通、古書など、絵本を取り巻く様々な内容を取り扱っている。
- JPIC読書アドバイザー資格取得者の年代も40歳代以上が多く、司書資格を持つ人が多い。在住地も東京都が26.5%であるが、全国から受講者が集まっている。
- JPIC読書アドバイザー資格取得者の有志による「読書アドバイザークラブ」(JRAC)があり、現在は約600名。ただし、JPICはJRACをサポートする立場であるため、その活動を強制することが難しい。
- 人材育成に関する課題として、定期的な学び直しが必要でありながら、そのために資格取得者に費用負担がかかることが挙げられる。その解決策の一つとして、講座テキストの電子化がある。eラーニングの開発も進めている。

### <意見交換>

## II. 図書館・学校図書館の運営上の諸課題への対応

### 2. 今後の図書館・学校図書館に求められる人材の育成等

#### 1 読書推進人材に期待される役割

- 学校図書館においては、学校司書とは違った専門性と役割をもって読書推進人材を活用する事例がある。
- 子供一人一人に対して、子供の発達段階や興味・関心に応じた図書を推薦できる人材が必要である。
- 学校における読書の時間で読書アドバイザーに協力が求められる事例がある。学校内で読

書の時間を設け、その機会で読書推進人材も関わることで、読者を増やすことができるのではないか。

## 2 読書推進人材の活躍機会の拡大に向けた課題と方策等

- 地域の読書推進人材の「人材バンク」のようなものを用意し、必要なときにその中から依頼をする仕組みがあると図書館も助かるのではないか。
- 読書推進人材の活用のために、司書・司書教諭・学校司書の配置充実が必要ではないか。
- 学校全体や地域全体の中で読書活動を推進するにあたっては、司書・司書教諭・学校司書が主体となるべきである。司書・司書教諭・学校司書の配置等を充実することで、読書推進人材の活用場が整備されると考えられる。
- 読書活動の専門的知識を有する人材が、教育課程を具現化する教員と協働できる環境の整備が課題である。
- 地域の人材活用の際に、学校で知り得た情報を口外しないなどの個人情報保護のルールを明確にし、トラブルを回避するための方策を講じることが重要である。

## 3 人材育成強化に向けた課題、期待される取組

- 児童の実態を踏まえて、学校側の要請に応えた活動ができるようなコーディネーター役の人材育成が大切である。

## 4 地域における多様な読書推進人材の連携促進（ネットワーク構築）の必要性等

- 読書推進人材の活用にあたっては、司書・司書教諭・学校司書の代替とならないようにすべきである。

## その他

- 図書館を「ツール」としての他、自己形成や成長のプロセスを担う場所として使うという視点もあっても良いのではないか。そのように捉えた上で、学校図書館現場で児童生徒への指導等ができることも考えられる。
- 教育課程における「言語能力」と「情報活用能力」を、図書館・学校図書館等がサポートするためのスキームを打ち出していけないか。
- 学校図書館や読書推進に関わる専門家である読書推進人材がどのような貢献ができるのかを、国語科のカリキュラム全体の中でもう一度見直したほうが良いのではないか。

以上